
ホットニュース(平成18年度／第101号)

●今月の業界ホットニュース／地方都市の生活の豊かさと課題

お盆休みはいつも田舎に帰省するが、その度に地方の生活の豊かさを実感する。人口約12万人ほどの地方の中心都市であるが、街なかから車で10分走れば、温泉もあり、ゴルフ場もあり、今なら浜辺で海水浴もできる。冬は30分でスキー場に行ける。大型店は百貨店を含めて6店、休日の駐車場は満杯のようで、車で生活する分には、何の不自由もないようだ。

ところが御多分に洩れず中心市街地は悲惨である。シャッター通りで、そのうえ古いアーケード街で、薄暗く人通りもまばらである。また経済状況も芳しくないようだ。ここ数年で大手企業の工場が2つ閉鎖されている。建設業の看板の多い街なので、公共事業の減少も響いていよう。

生活の環境には恵まれているのだから、中心市街地を含む産業の活性化がこの街の課題といえよう。いずれも深刻な課題であり、簡単には解決しそうもないが、街の規模からみれば何か目がありそうな気がする。市街地の走行で車で10分という距離は、2～3?の距離であり、バスや自転車にも適した距離であり、比較的コンパクトな市街地形成をしている街と言えよう。中心市街地問題で言えば、魅力があればそれなりに集客があつておかしくない立地条件にあると思われるのだが。

こうみると、よくある地方都市像の一つであろう。このような地方都市がネットワークを組んで共通の課題を模索するようなことを考えたらどうだろうか。

(代表取締役 堀田 紘之)

●神さまが通れる路地

毎年8月はじめの週末は、地域のお祭りです。土曜と日曜の午前は子どもが中心で、山車と子ども神輿が町内を巡行します。コースは決まっています、神酒所を10時にスタートし2時間かけて町内を一周します。

この町内、東京でも屈指の密集市街地に属し、巡行するコースは殆どが路地となります。今年、そのコースに変化がありました。これまで通ったことのない路地を「わっしょい、わっしょい！」とやったのです。その理由は、路地が一部分拡幅され山車が通れるようになったからです。この山車、30mほどの綱を70人くらいで持って曳くため、屈曲に弱く簡単にはコース変更ができません。

変更の結果どうなったか。子どものかけ声を聞いた路地界隈の人たちが、奉納金を持って、神酒所に駆けつけてくれました。はじめてのことだと長老は言います。

できるだけ多くの路地を巡行し、ファンを増やすことが、地域のお祭りの存続に繋がると考えます。しかし町内には、これを拒む路地がまだ多くあります。車は不要ですが、歩行者や自転車に加え神さまが通れる路地が多くあることが望まれます。界索性やコミュニティを生み出す最適の路地幅だと思えます。

(第二計画部 高尾 利文)

●環境負荷の小さいまちづくり/雪エネルギーの活用:新潟県上越市安塚区

旧安塚町は新潟県の南西部に位置する。平成17年1月に上越市など14市町村が合併し、旧安塚町は上越市安塚区となった。合併前は人口約3千人

の農業中心の町であった。

この旧安塚町では、豪雪地帯の特性を活かして雪エネルギーの活用を実践している。

○雪のふるさと安塚

旧安塚町は我が国屈指の豪雪地帯にあり、昔から雪は住民にとって重荷、邪魔者、過疎の元凶であると思われてきた。しかし、宿命である雪との関わりを見直すことを地域づくりの最優先課題とし、逆転の発想で昭和50年以降様々な形で克雪、利雪、遊雪に取り組んできた。

平成元年に後樂園球場にダンプ450台分の雪を持ち込み「さよなら後樂園スノーフェスティバル」というイベントを実施したことは有名である。また昭和61年には、日本で初めて雪そのものを商品化した「雪の宅急便」を発売した。さらに、住民が主体となって雪の中に約5万本のロウソクを灯す「キャンドルロード」などを通じて「雪のふるさと安塚」の知名度を高めてきた。

○雪エネルギーの活用

平成2年には雪国のまちづくりを具現化していくための研究、実践組織として「雪だるま財団」を設立し、農産物の雪中貯蔵や学校・福祉施設などへの雪冷房の導入を進め、雪エネルギーの活用を行っている。

雪冷房は、冬の間積もった雪を建物に設置された貯雪槽に貯め夏まで保存し、夏に貯雪槽と建物内の空気を循環させ、冷房を行うというシステムである。旧安塚町の雪冷房の取組みは、平成16年度に、「第9回新エネ大賞経済産業大臣賞」を受賞した。

また現在は太陽熱の利用などにも取り組み、自然エネルギーを活かしたまちづくりを進めている。

○田舎を活かす

旧安塚町では雪エネルギーの活用のほか、周辺町村と連携し「越後田舎体験」の事業を立ち上げ農村体験型観光を実施し、首都圏の小中学校の修学旅行などを受け入れている。自然体験、環境学習、農業体験など70種類以上のプログラムを用意し、「本物の田舎の自然と農業、暮らしを存分に体験してもらう」ことを最大の特色としている。現在、田舎体験事業は年間1億円規模の売上げを得る事業となっている。

旧安塚町の取組みは、生活の障害であった雪をまちづくりの味方につける、また田舎という環境を地域活性化に活用するという逆転の発想、地域特性を活かした工夫のまちづくり例である。

(第二計画部 内山 征)

=====